



東京都小平市 深澤 洋子 さん  
小平・環境の会



**Q** 差し支えなければ、年齢と出身地を教えてください。

**A** 65歳、生まれは大分県由布市の天神山というところです。

その日本の田舎からヨーロッパの田舎、ルーマニアに飛んだのが3歳。7歳の時に東京に戻り、多摩を転々、やっと小平に落ち着きました。そういうわけで色々な要素が入っています。

**Q** ごみ問題に関心をもつようになったのは何故ですか？

**A** 一人目の子を産んで半年後チェルノブイリ原発事故が起こり、不安を抱えながらドイツ留学中の夫の元へ母子で渡航しました。1年間、原発のこと、放射能を避ける方法を必死で勉強し、帰国後すぐに地元、東久留米の「脱原発へ一歩の会」に参加しました。しかし原発の問題を地域の小さなグループで続けることには限界を感じました。

10年後に小平に引っ越す頃にはダイオキシンの問題がクローズアップされていたので、ちょうどその頃、映画「水からの速達」をきっかけに発足した「環境を考える市民の会」に参加しました。良き仲間を得て、ごみ削減、焼却場建て替え、生ごみ堆肥化など次々と現れる課題に取り組むことができました。

**Q** ごみかんに入会して下さったきっかけは何ですか？

**A** 1996年末に開催された『三多摩発 アクションフォーラム～21世紀のごみを変える』に参加し、エアハルト・シュルツさんが話されたドイ

ツ環境自然保護連盟 BUND の影響力と環境教育まで含む活動の幅広さに感銘を受けました。

ですから、ごみ・環境ビジョン 21 が結成された時には、日本でもそうした広域的な市民運動の核ができるのだと嬉しくなり、入会したわけです。

それ以降、途中会費納入を忘れて抜けた時期もありますが、多くのことを勉強させていただきました。

**Q** ごみ問題に関わること以外で趣味や生きがいは？

**A** 私の本業はロシアのフォークロア（特に昔話・神話）の研究で、大学でロシア語の非常勤講師をしています。

古い時代のことが好きですが、原発事故をきっかけに現代社会にリアルに関わらずに生きていくことはできないと思い至りました。

実はごみ問題の次は、2003年頃から大学の同級生に誘われて八ッ場ダム運動に関わることになり、東京の会代表として住民訴訟を闘うという怒涛の十数年を過ごしました。

科学的論議で、嘘で塗り固められた利益誘導の土建政治、自然破壊をストップしたいという思いがありましたが、八ッ場ダム中止を社会の転換点とすることはできませんでした。

このダム（湖）が巨大な負の遺産になることは必定なので、いつか歴史が

私たちの運動の意義を明らかにする日が来ると信じています。

**Q** 特筆すべき近況があれば教えてください。

**A** 「二兎を追うものは一兎をもえず」を地で行くような経歴ですが、はや年金をもらう年頃になり、教師の仕事も徐々に減っていくので、これからはやり残した研究や翻訳に力を入れたいと思っています。

だいぶごちんまりしてしまった小平・環境の会でも地元でできる活動を続けたいです。

最近是有機フッ素化合物 (PFAS) の問題に注目し、3月25日(土)夜、沖縄の問題に取り組む人たちと共に講演会「PFAS問題(水汚染)を追って—沖縄と多摩—」をcocobunji プラザリオンホールAで開催します。

**Q** ごみかんに期待したいこと、あるいは提案したいことをお聞かせください。

**A** ごみと・SUNの記事は、データに基づく正確な分析や調査で頼りになるとともに、珠玉のエッセイや編集後記を楽しみに読んでいます。

企業や行政の専門家を呼んで直接話を聞く、議論する、といったことも、各市の小規模なグループにはなかなかできないことです。

ごみ・環境ビジョン 21には、これからも多摩のごみ問題に関わる市民たちのハブとしての活動に期待しています！



同じ場所から撮影した2011年4月の吾妻溪谷(左)と2019年4月、完成間近の八ッ場ダム(右)。八ッ場あしたの会HPより